

県大生 物部町で方言調査

2500語集め冊子配布へ

香美市

【香長】高知県立大学化学部の学生がこのほど、香美市物部町の庄谷相（しょうだに）あい、拓（つぶせ）の両地区で方言の聞き取り調査を行った。かつての地域の営みを再発見し、活性化につながる取り組みで、物部町に伝わる民間信仰「いざなぎ流」や、昔から盛んだった林業など、土地の生活に根付いた約2500語が集まった。（馬場 隼）

観光、活性化に利用

地域の言語や文化などを研究する橋尾直和教授と学生4人がプロ



ジェクトチーム「t.o. THE NEXT」(トウ・ザ・ネクスト)を組織し、大正昭和期に実際に話されていた方言を、昨年11月下旬〜今年1月中旬にかけて調査した。庄谷相に住む小松充

子さんの(84)に用例や体験を語ってもらい、地域の歴史に詳しい住民の解説も得ながら「言葉の背景にある文化や風俗、生活に注目する」と橋尾教授。方言を手掛かりに地域の魅力を掘り起こし、活用



調査結果をまとめる県立大生（高知市永国寺町）

地区ならではの方言の一つに「たたり」を意味する「ワザ」がある。体調が悪い時などに「太夫に見てもうたら、ワザがあつたら、ど治つたぜよ(太夫に見てもらったら、たたりがあつたけど治つたよ)」といった使い方をしたという。

「太夫」はいざなぎ流で、人に取りついた魔物をはらう儀式や祭儀を執り行う人物。体の不調や不吉な出来事を「たたり」と捉え、鎮めるために太夫を頼るなど、いざなぎ流信仰が暮らしに根付いていたことがうかがえる。

また「子孫のために植林などを残す」という意味の「シオキ」、原木の伐採やそれに従事する人を指す「サキヤマ」など、林業に関する言葉も多い。

2年生の小川了さん(20)は、こうした昔からの風習に基づく言葉

調査で集まった方言の一部

●アバサ	予想される災難から軽く逃れる。大事に至らなかった
●コザス	草木を株ごと掘り取る
●シオキ	子孫のために植林や住宅を残す
●シツエル	樹木が耕地の日陰や道の支障になる場合、集落委員の立ち会いの上、取り除く
●テンポー	いちかばちか。危険なこと
●ナグイ	考えなしに大食いする
●ミツジリ	水田の水加減を見て回る
●ヤマシオ	土砂崩れ(山津波)
●ワザ	いたずら。たたり

を「地域の皆さんにあらためて振り返ってほしい」と話す。

庄谷相、拓には物部町と香南市赤岡町を結ぶかつての交易路「塩の道」が通り、住民有志が整備や観光利用に取り組んでいる。小川さんは「復元された『暮らし』と『言葉』を活用できれば、塩の道などの観光ルートの充実や地域の伝統のPRにつながると思います」と期待を込める。

調査には香美市が2015年度から始めた、地域活性化に取り組む学生団体への助成金を活用した。結果は冊子にし、協力者や図書館などに近く配布する。

物部町庄谷相、拓地区の方言や生活、文化などを語る小松允子さん(右)ら(香美市物部町庄谷相)

